

# 自己愛的脆弱性・対人恐怖心性の成功恐怖心性への影響

—実際の成功恐怖経験にも着目して—

15005PCM 加藤 美幸

## I. 問題

成功することによって、否定的な感情を伴うことがあり、これを成功恐怖という(岡本, 1999)。成功恐怖の重要な要素として、他者との関係が考えられ(岡本, 1999), 中山他(1983)により、成功が親和的な対人関係を阻害するという懸念が、成功恐怖の中心的要因であることが示唆されている。さらに、成功恐怖を持つ人は、評価や競争に過敏であること、自己の能力を否定する傾向にあるが、能力がないことが露呈してしまう不安があること、成功が近づくと不安になり、自己妨害行動をとること、といった特性がある(藤江, 2006; 岡島他, 1983)。

また、青年期に特徴的な心性として、自己愛があげられる。過敏型自己愛というタイプは、潜在的に誇大性を持つものの、他者からの評価に敏感で、注目される状況を回避する傾向があり、対人場面において慢性的な緊張が生じやすく、自己愛の存在が窺えない型であるとされている(小塩他, 2011; 清水, 2011)。過敏型自己愛は、諸側面を考慮した自己愛的脆弱性によって測定されている。さらに、青年期は対人関係をめぐる不安や葛藤も生じやすい時期でもある(本嶋, 2006)。対人恐怖をもつ人は、他人の評価や視線を気にしており、自分の弱さに過敏で、不安を感じる状況では、自己が相手の評価の対象にされていて、低く評価されると思いつむ。(鍋田, 1997; 永井, 1994)。これらは成功恐怖と共通しており、成功する能力があるにもかかわらず、評価に過敏になることで、成功に恐怖感情を抱くことに関連しているのではないだろうか。

## II. 研究 1

### 1. 目的

「自己愛的脆弱性と対人恐怖心性が高くなること、成功恐怖が高くなる」ことを検討する。

## 2. 方法

**調査対象者:** A大学の学生 308名(男性 71名, 女性 235名, 不明 2名, 平均年齢 20.1歳  $SD=1.36$ )を分析対象とした。

**調査手続き:** 2016年11月14日—30日に実施した。講義時間内に質問紙を一斉配布した。

**質問紙構成:** 自己意識的感情特性尺度(榎本・米澤, 2008), 自己愛的脆弱性尺度短縮版(上地・宮下, 2009), 対人恐怖心性尺度(堀井・小川, 1996), フェイスシートで構成された。

## 3. 結果と考察

因子分析の結果、自己意識的感情特性は3因子、自己愛的脆弱性は4因子、対人恐怖心性は6因子が抽出された。各下位尺度間の関連を見るため、強制投入法による重回帰分析を行った。結果は図1, 2のパス図に示した通りで、仮説は部分的に支持された。

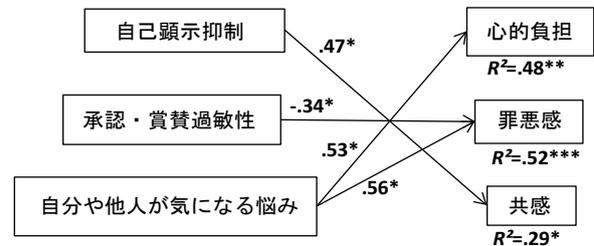


図1 自己愛的脆弱性と対人恐怖心性、自己意識的感情特性との関連(男性)

注) \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

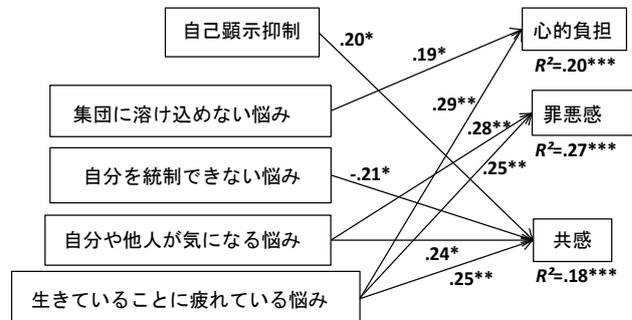


図2 自己愛的脆弱性と対人恐怖心性、自己意識的感情特性との関連(女性)

注) \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

自己愛的脆弱性を抱えた人は、承認・賞賛、慰め、配慮などを過度に求めるようになり、恥に対する敏感さと自己顕示が強い(上地・宮下, 2009) のに対し、対人恐怖心性を抱えた人は、他者が求める理想像を自らの理想自己として取り入れ、本来の自己を否定する(鍋田, 1997)。

以上のことから、自己顕示場面において、他人にどう思われるか気になることで恥意識が生じて、自己顕示を抑制しがちになるために、影響がみられたのではないだろうか。また、対人恐怖心性からは、他者に見られているというよりも、評価的観点を含んだ他者との関係がどのようなものであるかということが重要であることから、他者に与える負の影響について懸念し、成功することに対する恐怖感情に影響を与えていると考えられる。質問紙調査ではどのような場面で成功を回避するのか、どのように体験しているのかが測り得なかったため、研究2では面接調査を用いて検討することとした。

### III. 研究2

#### 1. 目的

「成功恐怖が実際の行動に与える影響について、成功恐怖が高い人は、低い人に比べて成功恐怖場面を経験している」、「成功することが対人関係を築く上で阻害要因になると考えることから、成功が回避される」ことを検討する。

#### 2. 方法

**調査対象者と手続き：**研究1の対象者のうち、同意を得た10名(男性3名、女性7名、平均年齢21.2歳、 $SD = 1.69$ )を調査対象とした。2016年12月にA大学内の心理面接実習室で、対面法、半構造化面接を用いた。所用時間は一人あたり約20分であった。

**面接内容：**成功できると思ったのにできなかった経験について尋ねた。経験がない場合、想定場面ではどう行動するか尋ねた。

**分析手続き：**逐語録をもとに、成功恐怖場面と行動、成功恐怖プロセスの分類を調査者と3名の心理学を専攻する大学院生によって行った。

#### 3. 結果と考察

自己意識的感情特性は、成功恐怖場面を経験した際に体験する成功恐怖の高さに対して影響

を与えている可能性があることがわかった。また、経験あり群において、成功を回避する行動に影響を与えていたのは、罪悪感と対人関係における危惧であると推測された。さらに、経験なし群においては、成功することが対人関係を築く上で阻害要因となることから、成功に対して否定的な感情を抱くものの、相手の将来に関わるような場面でない場合は、回避することの方が相手に嫌な思いをさせると考えることで、回避には至らないことが推測された。

### IV. まとめと今後の課題

対人恐怖心性を抱えた人は、他者が求める理想像を自らの理想自己として取り入れ、本来の自己を否定する(鍋田, 1997)ということから、本来ならば成功する能力があるものの、他者が自分に望む理想像が「自分よりできない」ものである場合、「相手よりもできない自分」を理想像として取り入れ、成功する自分という本来の自己を否定しようとしていると考えられる。しかし、自分や相手の将来に関わるような場面では、より評価が重要になり個人の責任性が大きくなるために、成功に対する恐怖感情が高くなると考えられる。また、通常のテスト場面では、回避する方が相手に嫌な思いをさせると考え、回避行動には至らないことが推測された。

また、成功恐怖と自己愛的脆弱性との関連は自己顕示抑制との間でのみ見られた。過敏型自己愛は自然な自己顕示ができない。成功したことを相手に伝えるということは自然な自己顕示であり、成功を伝えられない感情は自己愛的な満足感や自己価値観が満たされないことから生じたのではないかと考えられる。つまり、対人恐怖的な考えが影響することによって自己愛が満たされないと考えるために、それが恥体験となり、成功することに対して恐怖感情を抱いたのではないだろうか。

今後の課題としては、自己意識的感情特性尺度と既存の成功恐怖尺度との関連、個別面接調査の信頼性の検討、想定場面における親密な他者の性別、発達の推移に伴った対人恐怖傾向の変化と成功恐怖の発生や推移の検討を行うことが望ましいだろう。